

# 総論



# 第1章 概観（国土、民族、社会、歴史等）

## 1. 正式国名

カンボジア王国（Kingdom of Cambodia、以下、「カンボジア」とする）。国旗の青色は王室の権威、赤色は国民の忠誠心を表す。国旗の中央には民族の偉大な遺跡であるアンコールワットが仏教徒を象徴する白で描かれている。カンボジア国旗は、フランスからの独立以来数回デザインが変更されているが、アンコールワットが国家の象徴である点に変わりはない。右の国旗は 1993 年の王政復古の際に制定されたものである。



カンボジアの国旗

## 2. 人口

人口は約 1,495 万人で、2011～12 年の人口増加率は 1.69%である。平均寿命は 63 歳（以上、2012 年 US Census Bureau 推計）。年齢別の人口構成をみると、若年者人口の比率が高く、15 歳未満の人口が全人口の 34%を占める（2008 年、カンボジア国勢調査）。歪んだ人口構成は、ポル・ポト時代の虐殺の影響や、長年の内戦による戦禍とみることができる（[図表 1-1 参照](#)）。

## 3. 国土

カンボジアの面積は 18.1 万km<sup>2</sup>（日本の約 2 分の 1）。インドシナ半島に位置し、東にベトナム、西にタイ、北にラオスと国境を接する。国土の 73%を森林、16%を高地が占めている。カンボジアの中心にはメコン川とトンレサップ川の二大河川が流れ、流域には平野が広がり、西側に巨大なトンレサップ湖を擁する。

## 4. 首都

プノンペン。首都の人口は約 162 万人（2012 年、National Institute of Statistics 推計）で、人口の約 1 割を占める。日本との時差は 2 時間。

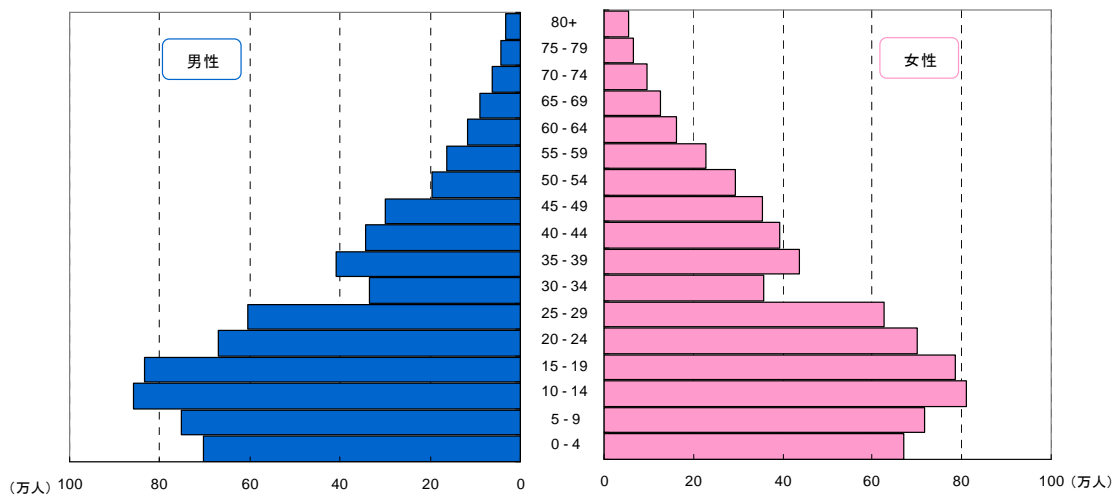
## 5. 気候

熱帯モンスーン気候。季節は、暑季（11～5 月）と雨季（6～10 月）に分かれる。平均気温は 28 度。最も暑い 3～5 月には、気温が 40 度を超す暑さとなる。

## 6. 民 族

大多数がクメール族（90%）。その他に華僑系、ベトナム系、チャム系民族がいる。

図表 1-1 カンボジアの人口構成 (2008 年)



(出所) カンボジア国勢調査より作成

図表 1-2 カンボジアの全地勢図



(出所) <http://www.freemap.jp> より作成

## 7. 王 室

憲法7条において、「国王は君臨するが、統治せず」と定められており、国民統合の象徴とされている。1941年から国王を務めたシハヌーク前国王は、2004年に引退。同年10月にノロドム・シハモニ国王が即位した。カンボジア独立の父として国民の厚い信頼を得ていたシハヌーク前国王は、2012年10月に療養先の北京で逝去した。

## 8. 言 語

憲法により、公用語はクメール語と定められており、国民の97%がクメール語を使用。その他、少数民族言語（2.9%）、ベトナム語（0.5%）が使われている。

## 9. 宗 教

憲法43条において、カンボジアの国教は仏教と定められている。カンボジア国民の97%が仏教徒（上座部仏教）で、他に、イスラム教徒（約2%）、キリスト教徒（約0.4%）等がいる。

## 10. 教 育

独立から暫くは、フランス統治時代に制定された、「六・四・二・一制」が敷かれていたが、ポル・ポト政権時代に全ての教育制度が廃止された。現行制度は、1996年に導入された「六・三・三・四」制（小6、中3、高3、大学や専門学校は4～6年制）。義務教育は小学校6年間、中学校3年間の9年間である。憲法第67条においては、国民は少なくとも9年間の義務教育を無償で受ける権利を保障されると規定されている。しかし、特に地方では貧困等が原因で教育を受けることができない児童も多い。

カンボジアには、2012年12月時点で13の国立大学がある。主要な大学には、王立プノンペン大学、国立経営大学、王立法律経済大学等（いずれもプノンペン）がある。1997年に私立大学の設立が認められたことから、近年、プノンペン以外での大学新設もみられる。

世界銀行の統計（2008年）によれば、15歳以上の識字率は、女子が71%、男子が85%、国民全体では78%となっている。

## 11. 通 貨

カンボジアの通貨はリエル（Riel）。2013年2月末現在、1ドル=3,995リエル、1円=43.48リエルである。

## 12. 歴 史

**1～14 世紀** | 1 世紀頃、カンボジア南部のメコンデルタ地帯に扶南王朝が誕生。扶南王朝は交易で栄えるが、ラオス南部に興ったクメール真臘が勢力を伸ばし、7 世紀に統合される。8 世紀初頭には、クメール真臘が南北に分裂し混乱の時代を迎えるが、802 年に、ジャヤヴァルマン二世が統一を成し遂げ、アンコール王朝を興す。アンコール王朝は 12 世紀に全盛期を迎え、この時期にはカンボジアの国民的遺跡であるアンコールワット等が建設された。アンコール王朝は、15 世紀半ばにシャム（タイ）のアユタヤ王朝との戦いに敗れ王都が陥落。同王朝の崩壊後も、王室の内紛による分裂が起こり、それぞれがタイ、ベトナム王朝に味方を求めたことから、両国への従属関係が強まっていった。

**フランス植民地時代** | 19 世紀に入ると、カンボジアの主権を巡って、タイとベトナムの覇権争いが激化する。当時の国王、ノロドム王は両国による干渉を排除する目的でフランスの支援を求めた。当時インドシナへの進出を目論んでいたフランスはカンボジアの保護を約束し、1863 年にフランスとの間で保護条約を締結。結果、カンボジアは実質的にフランスの支配下に置かれた。さらに 1884 年にはフランス・カンボジア協約が締結され、フランス保護領カンボジア王国が樹立された。

**独立達成後の政権交代と内戦** | フランスの植民地支配は、シハヌーク国王を中心とする独立運動により 1953 年に終焉を迎える。独立後、国王は王位を父に譲り、政治団体サンクム・リアス・ニユムを結成。1955 年にサンクム・リアス・ニユム政権の総裁に就任し、政権運営に従事した。1960 年代初頭、近隣諸国が東西冷戦構造に組み込まれる中、同政権では中立政策を敷くことにより、両陣営からの援助を引き出すことに成功。国内のインフラ整備を進め、農業開発や工業化を推進していった。しかし、ベトナム戦争の長期化の中、このような中立政策も長続きせず、1965 年に米国と断交し、北ベトナムと外交関係を樹立する社会主義路線へとシフトしていった。一方で、社会主義寄りの外交政策に対し、国内右派の反発が次第に強まっていった。

1970 年 3 月、シハヌーク首相の外遊中に、親米・自由主義を目指すロン・ノル将軍がクーデターを起こし、政権を掌握。「クメール共和国」の樹立を宣言し王政を廃止した。これに対し、国外にあったシハヌークは中国の支援を受けて「カンプチア民族統一戦線」を結成し、ロン・ノル政権に対抗。共産勢力であるポル・ポトが率いるクメール・ルージュ（KR）もシハヌーク支持に回りカンボジアは内戦に発展していった。内戦は KR 率いる民族統一戦線が優勢となり、1975 年にロン・ノルは国外に脱出した。

しかし、間もなくして KR がシハヌークから主導権を奪取し、プノンペンの王宮に幽閉したことから、内政はさらに混乱へ向かう。1975 年 4 月、ポル・ポト書記長が首相となり、民主カンプチア政権樹立を宣言。ポル・ポト政権は、原始共産制に基づく極端な自給自足政策を取り、既存の社会制度、教育、宗教活動を禁止した。同政権下では、知識人らの大

量虐殺が行われた他、強制移住や強制労働により 200 万人以上の国民が犠牲となった。

1979 年 1 月、親ベトナム派のヘン・サムリンは、ベトナム軍の支援を受けて新政権（プノンペン政権）を発足させ、「カンプチア人民共和国」が樹立。対するポル・ポト派はタイ国境へ敗走し、中国からの支援を受けてゲリラ戦を展開。幽閉状態であったシハヌークは、再び北京へと逃亡した。

1982 年 2 月、反ベトナム三派である、ポル・ポト派、シハヌーク派、ソン・サン派が北京で会談を実施。同年 7 月、中国及び ASEAN の後押しで、上記 3 陣営は、民主カンボジア三派連合（以下、3 派連合政府）を結成し、ヘン・サムリン政権と 3 派連合政府による内戦へと突入する。

**和平プロセス** | 1987 年以降、米ソ冷戦の雪解けや中国の対ベトナム柔軟路線を背景に、プノンペン政府と 3 派連合政府との和平交渉が活発化する。1989 年には冷戦が終結し、ベトナム軍はカンボジアから完全に撤退。同年 7 月にはカンボジア問題パリ国際会議第 1 回会合が開催された。その後の紆余曲折を経て、1991 年 10 月には、カンボジア問題パリ国際会議が開催され、「カンボジア紛争の包括的政治解決に関する協定」（パリ和平協定）が調印され内戦は終結した。

**新国家成立** | 和平協定調印後、国連カンボジア先導隊（UNAMIC）が停戦監視、武装解除、選挙準備を開始した。また、1992 年 3 月には、国連カンボジア暫定機構（UNTAC）が活動を開始した。UNTAC 暫定統治下の 1993 年 5 月には、初の国民議会選挙が実施され、ラナリット率いるフンシンペック党（第 1 党）、フン・センを中心とする人民党（第 2 党）の連立政権が発足した。同年 9 月には新憲法が採択・公布され、同憲法の下、シハヌークが国王（国家元首）に就任し、23 年ぶりに立憲君主制の新生カンボジア王国が誕生した。1994 年にはポル・ポト派が非合法化され、1998 年の同氏の死去によりポル・ポト派は消滅した。

**初の独自国民議会選挙** | ラナリット、フン・センの 2 人首相制では、次第に両者の対立が表面化していった。1997 年 7 月、首都プノンペンにてフン・センによる事実上のクーデターとされる武力衝突が発生。フン・セン派の軍隊が全土を掌握して、ラナリット第 2 首相は国外に追放された。1998 年、国際社会の働きかけによりラナリットが帰国。同年 7 月に、カンボジア独自の国民議会選挙が、日本や EU による国際選挙監視団の監視の下に実施された。選挙の結果、人民党が第 1 党になったものの、全議席の 3 分の 2 に満たなかったため、シハヌーク国王の仲介により、第 2 党フンシンペック党との連立政権が発足することとなった。フン・センが首相、ラナリットが国民議会議長に選出され、それまでの 2 人首相制は解消された。

**ASEAN 加盟から現在まで** | 1999 年 4 月、カンボジアは ASEAN に加盟し、10 番目の構成国として国際社会に復活した。これを契機に、ASEAN 域内経済への積極的な参画を果たしている。2004 年には WTO への加盟も果たし、以降、貿易・投資関連法制の整備を進めている。

国内政治においては、1999 年に上院を新設。2006 年に第 1 回上院選挙が実施され、人民党が圧勝した。2006 年の憲法改正では、1993 年に導入されたクォーター制（人民党とフンシンベック党で議席を分け合う取り決め）が廃止され、両党間での権力分有体制の解消が進んだ。同年 10 月ラナリットは指導力低下を理由に、同党の党首を解任され、11 月にフンシンベック党は分裂した。2007 年 4 月に実施された第 2 回地方議会選挙においても、人民党が首長の座を確保。これにより、同国の政治は中央・地方とも、人民党が主導する体制がさらに強化された。

2008 年 7 月には国民議会選挙が実施され、人民党はさらに議席数を伸ばした。同選挙の勝利により、人民党は再びフン・センを首相とし、第 3 次フン・セン政権が発足した。2013 年 7 月には第 5 回国民議会選挙が予定されている。

この他、2012 年 4 月には、カンボジア証券取引所（CSX）の取引が開始される等、経済発展に向けた歩みを進めている。

#### ひとくちメモ (1) : 王室について ~ ノロドム・シハヌーク前国王の生涯とシハモニ国王

2012 年 10 月 15 日、ノロドム・シハヌーク前国王が病氣療養のため滞在していた北京で死去した。89 歳だった。

カンボジアの激動の時代を生き抜いた前国王は国民からの人気も高く、「カンボジア独立の父」と呼ばれている。前国王の遺体がプノンペンに戻った際、空港から王宮へ向かう道では数万人が出迎えて死を悼み、国内の至る所に遺影が掲げられ、半旗が翻った。中国系の縫製工場では、追悼のため従業員が仕事をしないことを理由に前国王の写真を破棄した中国人管理職が警察に逮捕され国外追放となる事件が複数起こった。

カンボジア国王の位置づけは、憲法で「国王は君臨するが統治せず、民族の統合と永続性の象徴」と規定されている。

ノロドム・シハヌーク前国王は 1922 年 10 月 31 日生まれ。フランスの植民地下にあった 1941 年に 18 歳で国王に即位した。1953 年には粘り強い交渉の末、独立を勝ち取る。

1955 年から 1960 年までは父親のノロドム・スマリットに王位を譲り、政治活動を展開。しかし、1970 年、ロン・ヌルによる右派クーデターにより北京での亡命生活を強いられる。同時期、クメール・ルージュと「王国民族連合政府」を樹立。1979 年には、ポル・ポト派、サンソン派、シハヌーク派による三派連合を旗揚げし、1991 年のパリ和平協定、1993 年の国連管理下を経て国王に復帰した。

2004 年 10 月に自らの退位を表明し、後継者に息子のシハモニ皇太子の指名を「希望」。その後、王位継承のための委員会によりシハモニ皇太子への王位継承が決定した。なお、上院議員であり、かつて首相を務めたラナリットは、前国王の第 1 妃ノネン・カノル妃との間の子である。

現国王シハモニは、ノロドム・シハヌーク前国王とモニニアト妃の間に 1953 年に生まれた。なお、モニニアト妃はフランスとカンボジアのハーフで、前国王の第 6 妃である。現国王は 9 歳からプラハでクラシックバレエを学んだ後、パリでバレエ教師やユネスコ大使として活動。前国王が王宮内で幽閉されていたポル・ポト政権期には帰国し、宮殿内で生活していた。

国王即位後は全国各地を巡り、国民との対話に時間を費やした。その様子はテレビでも放映され、現国王の温かな印象が国民に根付いている。また、独身で子女はおらず、生涯独身主義者であるとの噂もある。



図表 1-3 カンボジアの歴史

年月	略史
王政、フランス植民地化、インドシナ戦争、ポル・ポト政権による混乱の時代	
1世紀	扶南国建立
9世紀	アンコール王朝建立 (9~13世紀にアンコール遺跡地方を拠点にインドシナ半島の大部分を支配)
12世紀	アンコール・ワット建設
13世紀	アンコール・トム建設
15世紀半ば	タイのアユタヤ王朝との戦いに敗れ衰退
1863年	フランスとの保護条約締結により統治下に置かれる
1884年	フランス保護領カンボジア王国樹立 (フランス・カンボジア協約調印)
1941年	シハヌーク国王即位 (18歳)
1945年	独立宣言するも日本の敗戦により失効
1953年	カンボジア王国としてフランスから独立
1954年	対日賠償請求放棄
1955年	日本・カンボジア友好条約調印 (56年発効)
1970年	反中親米派ロン・ノルらがクーデターによりシハヌーク政権打倒 王制を廃しクメール共和国樹立 (ロン・ノル政権発足) 親中共产勢カクメール・ルージュ (KR) との間で内戦勃発
1975年	KRが内戦に勝利し、民主カンボジア (ポル・ポト) 政権発足 同政権下 (1975-79年) 大量の自国民虐殺が行われる
1979年	ベトナム軍の進攻でKRが敗走 プノンペン (ヘン・サムリン) 政権発足 (カンブチア人民共和国樹立)
1982年	民主カンボジア三派連合 (ポルポト派、シハヌーク派、ソン・サン派) 発足 ヘン・サムリン政権と三派連合による内戦へ
和平の成立、新生カンボジアの誕生。国際社会への参画へ	
1989年	カンボジア問題パリ国際会議開催
1991年	パリ和平協定締結
1992年	国連カンボジア暫定機構 (UNTAC) による暫定統治開始 (~1993年) (日本は国際連合平和維持活動[PKO]に初の自衛隊を派遣)
1993年	第1回国民議会選挙。王党派フンシンベック党勝利 ラナリット第1首相、フン・セン第2首相連立政権発足 新憲法制定で王政が復活
1997年	首都プノンペンでラナリット、フン・セン両首相陣営が武力衝突 ラナリット第1首相失脚 (7月事変)
1998年	第2回国民議会選挙。第1次フン・セン首班連立政権 ポル・ポト死去
1999年	上院を新設 (二院制へ移行) ASEAN加盟
2003年	第3回国民議会選挙。第2次フン・セン首班連立政権発足 (2004年)
2004年	WTO加盟。ASEM参加決定 シハヌーク国王が引退し、シハモニ新国王が即位。
2006年	第1回上院議員選挙
2007年	日本・カンボジア投資協定締結 (2008年発効)
2008年	第4回国民議会選挙。第3次フン・セン首班連立政権発足
2009年	クメール・ルージュ (KR) 裁判開始
2012年2月	第2回上院議員選挙
2012年4月	カンボジア証券取引所取引開始 ASEAN議長国としてASEAN首脳会議開催
2012年10月	シハヌーク前国王逝去

(出所) 外務省ホームページ、その他資料より作成

## ひとくちメモ (2) : 外部機関からみたカンボジア政府のガバナンス評価

カンボジア政府のガバナンス力は、他国に比べて著しく劣っているのだろうか。この点については、世界銀行とブルッキングス研究所が、民間企業、市民、専門家等に対して行ったサーベイ (Worldwide Governance Indicators) を基に発表している、200 カ国以上を対象とした各国政府のガバナンスの 6 つの指標が参考になる。

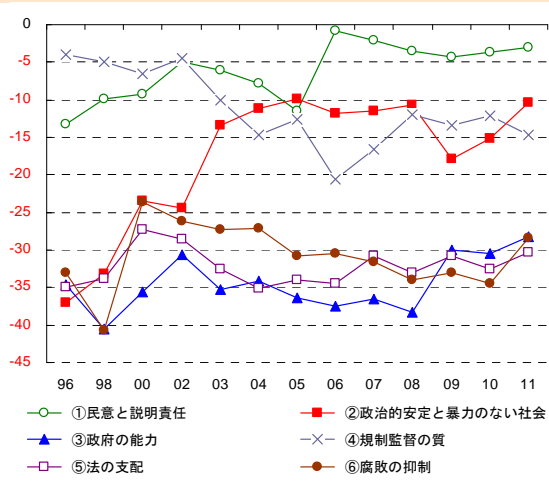
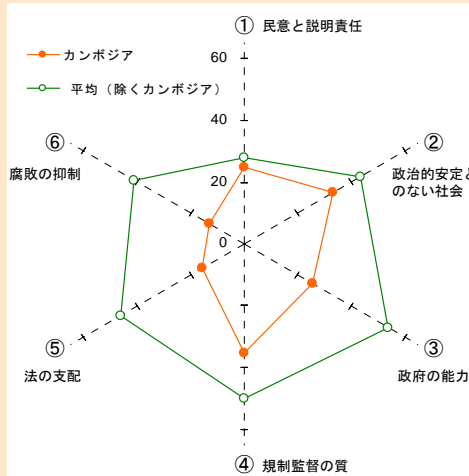
6 つの指標とは、①民意と説明責任 (Voice and Accountability)、②政治的安定と暴力のない社会 (Political Stability and Absence of Violence /Terrorism)、③政府の能力 (Governance Effectiveness)、④規制監督の質 (Regulatory Quality)、⑤法の支配 (Rule of Law)、⑥腐敗の抑制 (Control of Corruption)、であり、100 点満点で評価されている。

カンボジア政府のガバナンス力は、他の ASEAN 加盟 9 カ国に比べて評価は総じて低い (右図)。2011 年の 6 指標の平均スコアは 24.5。ミャンマー (4.1)、ラオス (20.2) に次いで、下位から 3 番目のスコアである。

項目別にみると、相対的に高く評価されているのが、①の「民意と説明責任」である。カンボジアのスコアは 24.9 と、その他 9 カ国の平均 (27.9) とほぼ同レベルにある (下図左)。

また、時系列でみれば、②の「政治的安定と暴力のない社会」での評価が大きく改善している (下図右)。1996 年時点では、他国の平均に対して 37.0 点劣っていたが、2011 年にはその差が 10.4 点にまで縮小している。③の「政府の能力」も、2008 年以降改善している。一方、なかなか改善されていないのが、⑤の「法の支配」と⑥の「腐敗の抑制」である。それぞれ、他国に比べて 30 点前後低い評価を受けている。カンボジア政府に対して、法律に基づく運用や腐敗・汚職の撲滅が求められていることが、外部機関の見方からも窺える。

国名	平均
シンガポール	86.4
ブルネイ	72.4
マレーシア	60.9
タイ	43.1
インドネシア	35.9
フィリピン	35.8
ベトナム	34.0
カンボジア	24.5
ラオス	20.2
ミャンマー	4.1
平均値	41.7
中央値	35.8



(出所) World Bank 資料より作成 (<http://info.worldbank.org/governance/wgi/index.asp>)